

## 包括支援の謎解き

地域包括支援に関しての勉強会が医師会を中心に開催されている。話が在宅中心に行われ、中学校単位ぐらいの地域に、5人の雇われ医者が、一人あたり20人ぐらいの在宅患者を診ることが望ましいと聞いた。包括支援を発案したという、厚労省の課長による講演会にもでた。仕組みを組み立てたという大学教授の講演も聞いた。どれもこれも今ひとつ、医師の役割、包括支援の制度、その意味するところが理解できないでいた。

たまたま柏モデルを担当した准教授の話聞いて、なんとなく雲の向こうがかいま見えた気がした。医師会からの話でも、なんとなく辻褄が合うような話だった。地域包括支援センターを中心として、地域ボランティアを養成し、現在の介護職はより専門的な仕事という要介護の人たちを担当し、現在の要支援の方たちは地域ボランティアが支える方式のようだ。ヘルパー職の時間単位給が、ボランティアに頼むと3分の1ぐらいに減る。モデル地区となっているところではすでに移行しつつある。

すべてが全て地域密着型となるようだ。地域の言わば元気な高齢者が、ボランティアの中心となり、これまでのシルバー協会のように職を求める人達を中心となり、地域の支援を必要とするある意味弱者を支援するような仕組みらしい。この仕組みを納得させるために、医師会が中心となり、多職種との顔の見える連携を目指しているものと理解した。医師はしゃしゃり出ることなく、多職種の人たちをお願いすることが肝心だという。

講演でも、サルコペニアは予防が大事、そのために、地域包括支援をと話している。だが、実情、患者さんたちを見ると頑張って食べ、頑張って歩きと努力をするもののヒラメ筋辺から痩せてくる。すり足歩行となってからは2年ぐらいで鬼籍に入られる方が多い。サルコペニアについても治療は確立していない。メタボリックステロイドに可能性が残るかと思う。だが、患者さんの中には、高齢となっても、アチラコチラ、世界を股にかけ旅している人達がいる。全日空の宣伝にも「旅するものは云々」というフレーズもある。果たして、高齢者を地域に縛り付ける仕組みでいいのか、姉妹都市間でのやりとりは……。まだ開業医がしゃしゃり出る余地はある。



多摩東部地域産業保健センター 〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 3-38-4 三鷹産業プラザ 404

TEL 0422-24-6906 FAX 0422-24-6908

メールアドレス [sanpo@kind.ocn.ne.jp](mailto:sanpo@kind.ocn.ne.jp) HP <http://www.sanpo-tama.jp/>